

新たな表出・理解語彙発達検査の開発

水戸陽子（北里大学 医療衛生学部 助教）

【背景・目的】

子どもの語彙は、表出語彙数が 50 語を過ぎる 1 歳半ごろから爆発的に増加し始め、6 歳で約 3000 語と推計される（石田, 2016）（図 1）。表出語彙が 50 語以上に増加したあたりから 2 語文を表出できるようになるなど、語彙発達と文法発達には連続性があり（小椋, 2016）、より高次の意味的处理や統語水準は、抽象度のより高い語彙の習得や語彙の広がりによって導かれる（Marchman and Bates, 1994）。このように、語彙の獲得は言語発達の中核的要素の一つである。

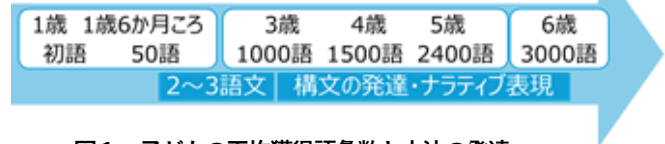


図1 子どもの平均獲得語彙数と文法の発達

これまでに本邦で報告されている語彙発達の研究は、少数サンプルの縦断的研究が主であり、多数のサンプルにより子どもの言語発達の輪郭を明らかにしようとする横断的研究は報告が少ない。したがって語彙の発達の具体的な様相については、さらに知見の蓄積が求められている状況であるといえよう。さらに本邦には、数々の言語発達検査が存在するが、語彙発達の評価においては、客観的評価による表出語彙検査がない、幼児後期、学童期の語彙発達を評価できる検査がないなどの問題がある。そこで本研究では、本邦における上記の問題点を踏まえて、語彙発達の的確な評価を可能にする、新たな表出・理解語彙発達検査を開発することを目指し、幼児期の語彙発達の様相の基礎的データを収集することを目的として、2 歳～6 歳児に調査を実施し、標準的な言語発達のデータを得ることを試みた。

【方法】

対象は、関東大都市圏および東北地方都市圏の保育園、幼稚園に所属する 2 歳から 6 歳の 350 名である。先行研究（水戸ら, 2023）をもとに理解語彙課題、表出語彙課題を作成し、実施した。両課題ともに、名詞 60 語、動詞 26 語、形容詞/形容動詞 15 語で構成され



図2 図版の例：左）表出課題 右）理解課題

ている（図 2）。各課題（理解課題、表出課題）の品詞別（名詞、動詞、形容詞）における平均正答数および平均正答率（%）を算出し、分析対象者全体に加え、年齢群別、性別、地域別について、要約統計量を算出した。さらに、対応のない t 検定を用いて、年齢群別に群間比較（性別間、地域間）を行った。また、各語彙別の平均正答率から 75% 通過年齢を算出した。基準関連妥当性をみるために、理解課題の各品詞の平均正答数と PVT-R の修正得点、表出課題の各品詞の平均正答数と WPPSI-III の「絵の名前」の粗点の相関分析を行った。検定には、スピアマンの順位相関係数を用いた。

【結果・考察】

理解課題および表出課題ともに、全ての品詞において、年齢上昇に伴う平均正答数の上昇を認めた。水戸ら（2023）の 20 年前の結果と比較して「理解の正答率は高く、表出の正答率は低い」という傾向を示しており、例えば情報端末デバイスなどの普及が子どもの語彙発達の様相に影響を与えた可能性なども考えられた。地域差の分析では、一部の語では、年齢に伴う平均正答率の推移に地域差があり、例えば表出課題における名詞「ゆき」では、全分析対象者の平均正答率が関東圏 37.4%、東北地方 78.9%、中国地方 46.0% であり、地域によって経験の差が生じやすい事象については、子どもにとっての頻度や親密度が異なり、獲得年齢に差がある可能性が示唆された。またほぼすべての語彙は、年齢の上昇に伴い平均正答率が上昇しており、各語彙の 75% 通過年齢を得ることができた。表出課題の動詞および形容詞/形容動詞の各語彙については、ヒント無に比べ、ヒント有の方が平均正答率は高い傾向を示し、ヒントの有無による平均正答率の違いは、名詞、動詞、形容詞/形容動詞の語彙の喚語等の表出に至る過程の違いを現している可能性が推測された。

【今後の課題】

2 歳～6 歳児に調査を実施し、標準的な言語発達のデータから、幼児期の語彙発達の様相を明らかにした。今後は、2 歳前半や 6 歳後半の幼児にも調査を行い、幼児期全体の語彙発達の様相の解明を試みる。さらに、表出課題にて 6 歳後半でも平均正答率が満点に満たない場合、対象年齢を広げることで就学前後の表出語彙の発達の様相を得られる可能性も視野に入れて、調査を続けていく予定である。これらのデータをもとに、言語発達の遅れの早期発見と指導支援のエビデンスとしての指標となり得る検査の開発につなげていきたい。